

NPO法人・TICOスタッフとしてザンビアに 滞在し出産待機施設「お産を待つ家」開設に奔走



せとぐち ちか
瀬戸口 千佳さん



2012年1月からアフリカのザンビアに入り、「お産を待つ家」の開設準備に奔走した。建物は早々と完成していたが、約束していた現地政府からの医療スタッフ派遣が難航。4月の予定だったオープンは11月にずれ込んだ。

日本の団体が計画しているのだから、自分たちでどうにかするのでは。スタッフ派遣の遅れに、当局のそんな甘えが見て取れた。「日本からスタッフを連れてくるのは簡単。でも、ザンビア人だけで運営できないと意味がない」。

持続可能な支援体制を目指し、粘り強く交渉を重ねた。

「ほっとかれへん」。ザンビアの人たちについて話す時、関西弁で何度も口にした。おおらかで明るく、人なつこい人たち。彼らにとって世話をしてくれる人はみんな母親で、自分の父親ほどの年代の人にも「ママ」と慕われる。「とにかく触れ合う」がモットー。得意の英語を使って、現地の人々とことん話す。車を持たない彼らと同じように、施設近くの村々を徒歩で回ることも。炎天下

を水も飲まず歩き、衛生状態や医療ニーズを調べる。

一軒一軒が遠く離れているため、1日歩き続けても訪問できるのはせいぜい7、8軒。それでも「困ったことはないですか」の一言を喜んでくれる人がいる。「頼りにされるとうれしい。苦勞が多くてもやめられないんです」と、照れくさそうに笑った。

小学生のころからラジオ講座を聴いて勉強し、英語を習得した努力家。人の役に立つ仕事がしたいと、東京大学大学院を修了後の2009年4月に徳島県を訪れ、多彩な国際支援活動に取り組むTICOで活躍の場を見つけた。

「ホームシックにはならない。現地で困るのは、服のサイズが大きすぎて合わないことくらい」。

必要とする人々が待つ場所へ、9日には再び戻る。神戸市出身の29歳。

(乾栄里子)